

# 第4章 江戸時代の諸国産物帳にみる 生薬の分布の変遷 —当帰・萱草の事例—

柳澤雅之

京都大学東南アジア地域研究研究所

## はじめに

近世以降のアジアの海域交流と広域市場の変容の中で、日本国内における薬用植物資源の生産・消費・流通は大きく変化した。中国からの輸入品が高価になるにつれ、日本国内での生産と流通が奨励された（岡田 2020）。生薬としての利用を目的として外国から輸入された植物は、徳川幕府や各藩によって開設された薬園で栽培され、やがて、一般に普及したり、あるいは消滅したりするなど、植物によってさまざまな経緯を経たと考えられるが、その詳細は明らかではない。筆者はこれまで、江戸時代に作成された諸国産物帳を利用し、肉桂（シナモン）の分布とその変化をマッピングした（柳澤 2020）。本章は、当帰と萱草に焦点をあて、江戸時代における分布をマッピングした結果を報告する。それにより、生薬の種類によって異なる経緯での伝播と分布を考えるための基礎資料とすることを本章の目的とする。

## 調査方法

本研究では、江戸時代における薬用植物の伝播を確認する資料として、肉桂の際と同様に、享保・元文の時代に収集され、全国一斉に調査が実施された産物帳である『享保・元文諸国産物帳集成』と、江戸時代後期に、主に各藩によって収集・記録された『江戸後期・諸国産物帳集成』を利用する（盛永・安田 1985、安田 1995）。各産物帳の概要については、すでに記しているので省略するが、前者は 1734 年ごろの記録、後者は 18 世紀後半から 19 世紀にかけての記録である。

また、産物帳を利用する際の注意点として、各産物帳に収集された藩領の確認と、植物の別名を確認する必要がある（柳澤 2020）。『享保・元文諸国産物帳集成』と『江戸後期・諸国産物帳集成』のそれぞれが網羅する範囲を図 1 に示しておく。

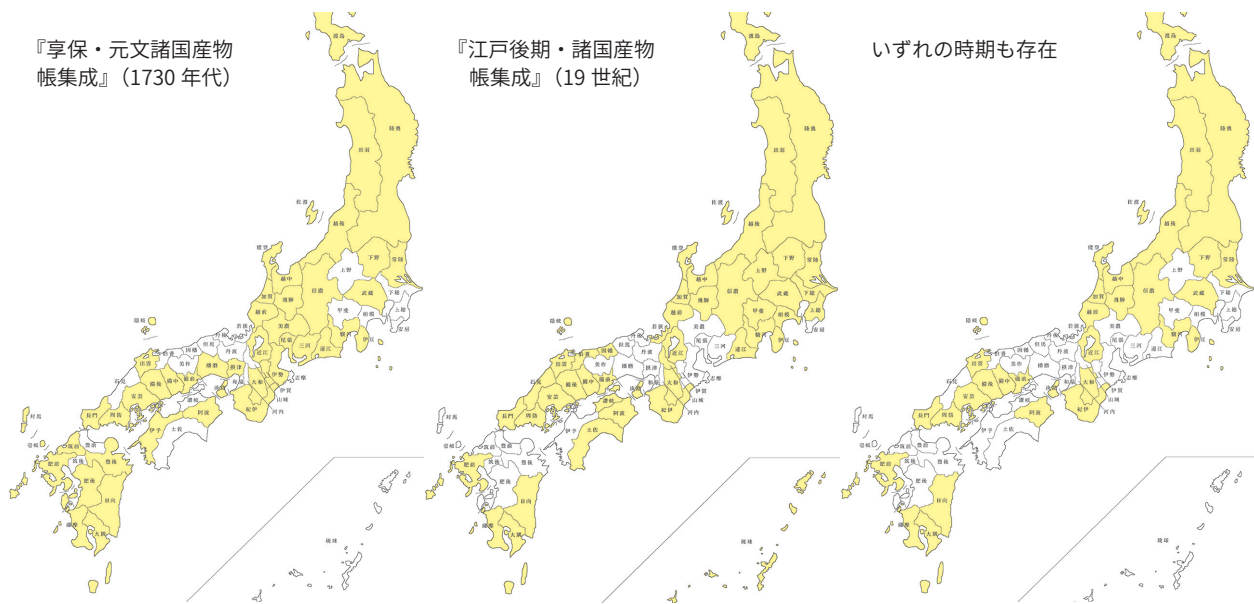


図1 『享保・元文諸国産物帳集成』と『江戸後期・諸国産物帳集成』で記録が確認される地域

植物名の別名については、当帰と萱草についても検討を要する要確認事項である。注意すべきは、すべての別名が、実際に当帰あるいは萱草であると認定することはできないことである。そもそも、復活された諸国産物帳では多くの場合、図版がなく、植物名の記載からだけでは、当帰あるいは萱草を意味しているかどうか必ずしも明瞭ではない。実際、当帰あるいは萱草として記載されたものでも、生薬における当帰あるいは萱草であるとは限らない場合や、索引として採用されている語彙についての間違いが見いだされた場合もある。そこで本研究では、語彙を限定したマッピングを行った。マッピングに採用した語彙を限定して明らかにしておくことで、将来における間違いの修正と新たに確認された語彙の追加が可能となるからである。

## 当帰のマッピング

『世界有用植物事典』によると、当帰は、学名 *Angelica acutiloba*、セリ科の多年草で、山の岩地に生え、薬用植物として栽培もされる。変異が多く、本州中部以北や北海道の山に自生するものはミヤマトウキ、一名イワテトウキとよばれる。根を乾かしたものを生薬では当帰とよぶ。大和当帰は精油分および糖分が北海当帰より多い。中国や朝鮮の当帰とは別の種にされニホントウキとよばれることもあるし、中国では日本のトウキを東当帰あるいは日本当帰とよぶという（堀田 1989）。

諸国産物帳では、トウキあるいはそれに近い音を含む語彙が多数、出現する。しかし、本研究では、「とうき」「たうき」「当帰」「當歸」「当歸」「當歸」「当販」「むませり」の出現をマッピングすることとした。これらに関連する語彙として、諸国産物帳には次のような語彙が出現した。すなわち、「山とうき」「どとうき（土当帰）」「やまととうき」「おほたうき」「さんとうとうき」「いをふぜんとうき」「いぶきたう（ふ）き」である。「やまととうき」は大和当帰と考えられ、『江戸後期・

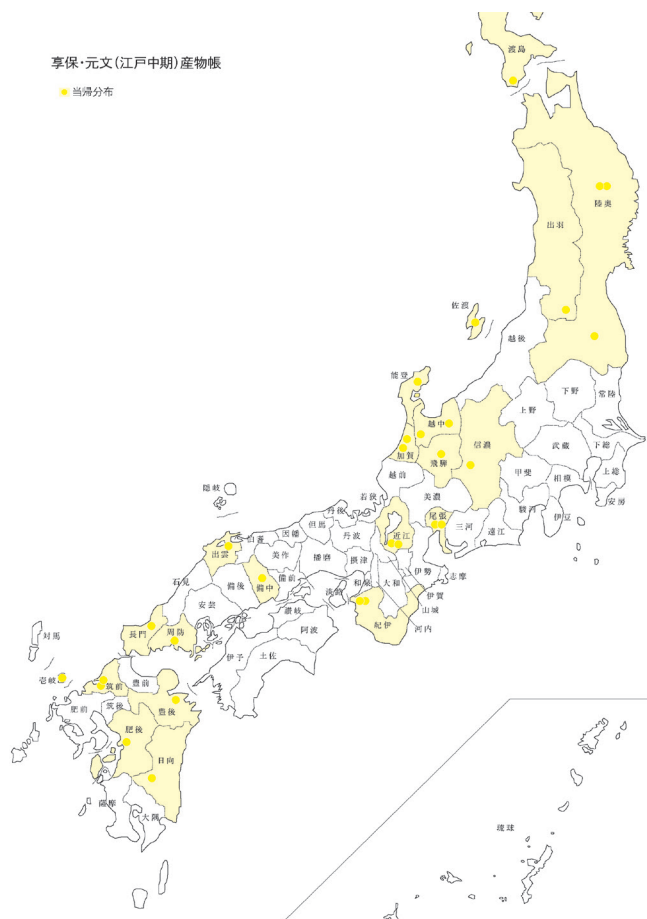


図2 『享保・元文諸国産物帳集成』にみる当帰の出現分布 図3 『享保・元文諸国産物帳集成』にみる「むませり」の出現分布

『諸国産物帳集成』に一回、「当帰」の項目（第5巻40ページ）に、和名オホゼリ、方言ヤマトウキとして出現する。「いぶきとうき」は、『江戸後期・諸国産物帳集成』では、「イヲフゼントウキ 硫黄山ニ多シ 江州伊吹山ニ多ク産ス京都エ出ス故ニイフキタフキト云薬用不可ナリ」（第6巻4ページ）と記載されたり、「タウキ当帰」と別項目がたてられ、「イブキタウキ 本草○薬用に下品なり」（第8巻461ページ）と記載されたりしており、生薬としてのどの程度、利用されていたのかが不明瞭であるため、今回のマッピングでは採用していない。

「とうき」「たうき」「当帰」「當歸」「当歸」「當歸」「当販」「むませり」として出現した、当帰のマッピングを図2～図5に示す。図2～図4は、『享保・元文諸国産物帳集成』に出現した当帰、図5は、『江戸後期・諸国産物帳集成』に出現した当帰を表している。また、図3は「むませり」の分布、図4に、当帰と「むませり」の両方の分布を示した。図5では、「むませり」の出現が1回のみだったので、当帰と「むませり」の両方を1枚の図で示した。

図4と図5を全体的に比較すると、享保・元文の時代の当帰の出現数は47、江戸時代後期の出現数は43であった。いずれの時期においても、日本国中に分布しているものの、時代を経て出現数が増加しているわけではなかった。

図4と図5を地域的に比較すると、東北や関東、中国地方は全体的に増加傾向が認められた。しかし、美濃、尾張、筑前、肥後では出現が見られなかった。これらの地域は、図1によると、享保・元文の時代の資料はあるが、江戸時代後期の産物帳には資料が存在しなかった地域であり、江戸時代後期になって当帰

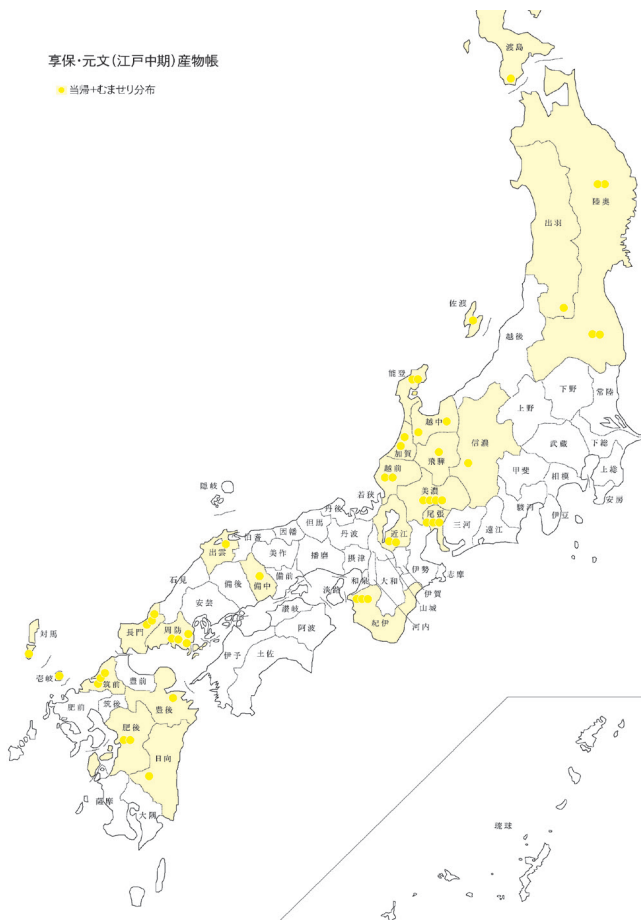


図4『享保・元文諸国産物帳集成』にみる当帰（「むませり」を含む）の出現分布

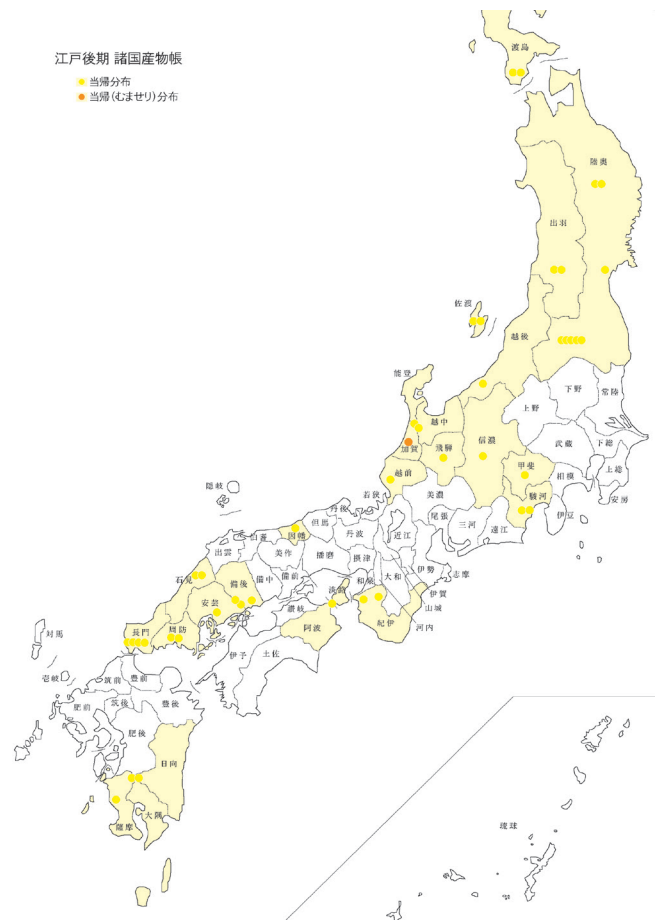


図5『江戸後期・諸国産物帳集成』にみる当帰の出現分布

が本当に利用されなくなったかどうかは、地域ごとの史資料をあわせて検証する必要がある。

また、江戸時代の代表的な植物図譜のひとつである岩崎灌園の『本草図譜』では、當歸（とうき）の別名として「むませり」をあげている<sup>1)</sup>。「むませり」の出現数は、享保・元文の時代が18、江戸時代後期がわずか1であった。その分布は、中部地方と中国地方、東北地方が比較的多かった。享保・元文の時代の中中部地方の場合、飛騨、加賀、越中、信濃では「とうき」として出現し、美濃、越前では「むませり」として出現した。能登、尾張では、「とうき」と「むませり」の両方が出現した。中国地方では、周防と長門で、「とうき」と「むませり」の両方の出現が確認された。しかし、江戸時代後期には、「むませり」としての出現は、加賀でのわずか1件のみであった。享保・元文の時代に「とうき」と「むませり」の両方の出現が確認された地域のうち、能登、周防、長門は、江戸時代後期の分布によると、すべて「とうき」として出現していた。

また東北地方では、享保・元文の時代、「とうき」のみが出現するのが出羽、「とうき」と「むませり」の両方が出現する福島（陸奥）があり、いずれも、江戸時代後期には「とうき」として出現し、その出現数も増加していた。

1) 岩崎常正〈岩崎灌園〉『本草図譜』第1冊巻9 芳草類上之上。請求番号寄別9-1-2-1、国立図書館デジタルコレクションより閲覧。URL：<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288478?tocOpened=1>（最終閲覧日：2021年3月19日）。

## 萱草のマッピング

『世界有用植物事典』によると、カンゾウ（萱草）類は、根にステロイド、トリテルペノイド、アルカロイド等を含み、中医方では、水腫、濁尿などの利尿剤とされ、血便、鼻血、黄疸などにも用いられるとされる（堀田 1989）。「カンゾウ」の名を持つ種類は多いが、学名 *Hemerocallis fulva* L. var. *disticha* (Donn.) M.Hotta（ノカンゾウ）は、西南日本に多く分布する暖温帯系の種類、*Hemerocallis fulva* L. var. *kwanso* Regel（ヤブカンゾウ）は地下に長い走出枝をだす三倍体の種類である。

諸国産物帳では、カンゾウあるいはそれに近いの音を含む語彙が多数、出現する。しかし、本研究のマッピングのために採用した語彙は、萱草という語を含む、「くわんざう、萱草」「くわんざう、鹿葱、山慈姑」「けんざう、萱草」「けんざう、萱草 [→くわんざう]」に限定した。

岩崎灌園の『本草図譜』では、萱草の一種として、「わすれくさ」や「なんばんくわんさう」、「ひめくわんさう」等、7種が図と共に記載されている<sup>2)</sup>。ふたつの時代の諸国産物帳の索引に出現する関連語彙として、「やふくわんさゆ、萱草、千葉石蘭」、「ろんごくさ、萱草」、「おにくわんさう」、「きつねくわんさう」、「しまくわんさう」、「しまくわんざう」、「すじくわんざう」、「ひめくわんさう」、「ひめくわんざう」、「やふくわんさう」、「やぶくわんさう」、「くわんざうな」、「しまくわんざう、文萱花」、「すぢくわんざう」、「ひめくわんざう、金萱」、「みづくわんざう、水葱?」、「ろんごくさ、萱草」、「めな、鹿葱、山慈姑」等があった。

また、かんぞうと同音の生薬に甘草がある。諸国産物帳でも、「甘草」「かんそう」「あまくさ」「かんざう」が見られる。かな表記された萱草と甘草を区別するために、漢字の「萱草」を伴わず、かな表記のみの「かんぞう」「かんざう」はマッピングに含めなかった。

「くわんざう、萱草」「くわんざう、鹿葱、山慈姑」「けんざう、萱草」「けんざう、萱草 [→くわんざう]」として出現した、萱草のマッピングを図6～7に示す。図6は、『享保・元文諸国産物帳集成』による出現した萱草、図7は、『江戸後期・諸国産物帳集成』による出現を表している。

図6と図7を全体的に比較すると、享保・元文の時代の出現数は64、江戸後期の出現数は37であった。全体的に減少傾向にあるが、中でも減少が目立つのは、関東から伊豆、遠江にかけての地方、紀伊、北陸であった。また、当帰と同様、美濃と尾張は、享保・元文の時代に出現が確認されたが、江戸時代後期の記録がないため、減少したのかどうかは不明であった。周防、長門は、出現数に大きな変化はなかった。また、江戸時代後期の諸国産物帳において福

2) 岩崎常正〈岩崎灌園〉『本草図譜』第2冊巻17 湿草類5。請求番号寄別9-1-2-1、国立国会図書館デジタルコレクションより閲覧。URL: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287126?tocOpened=1>（最終閲覧日：2021年3月19日）。

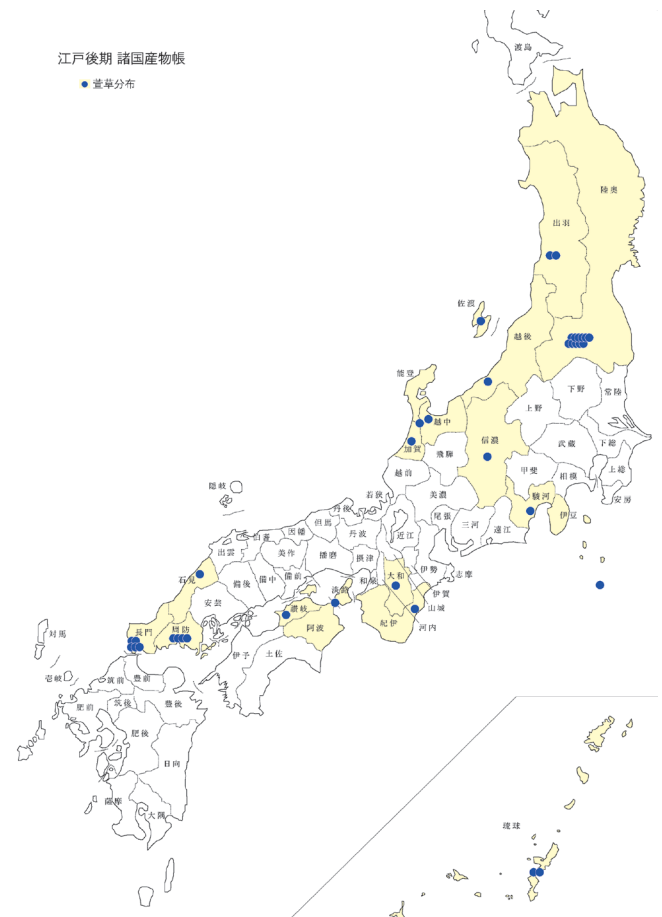
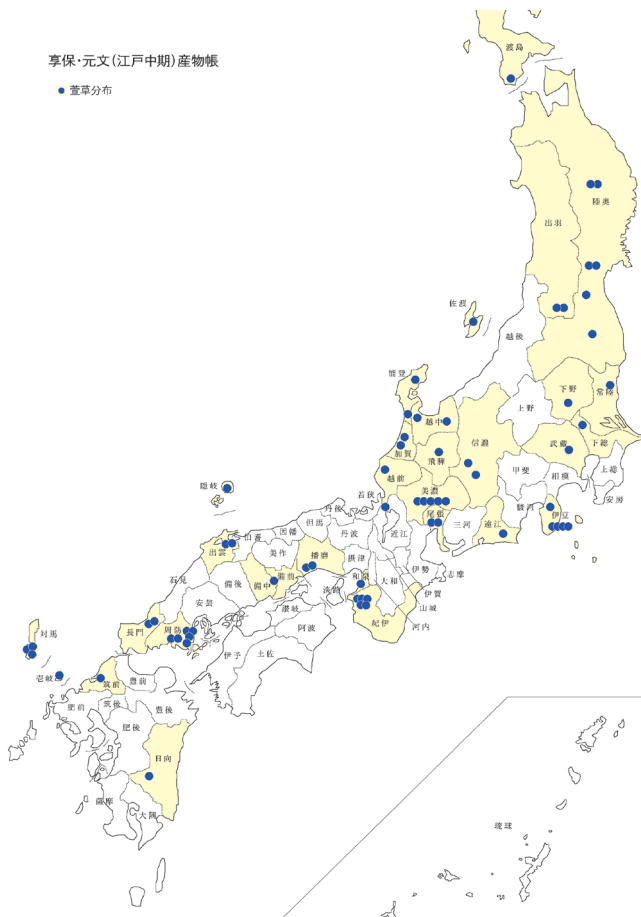


図6『享保・元文諸国産物帳集成』にみる萱草の出現分布 図7『江戸後期・諸国産物帳集成』にみる萱草の出現分布

島で多数の出現が確認されるのは、村ごとの出現が確認されたためであった。『江戸後期・諸国産物帳集成』第3巻に収録された『出羽風土略記』の「寛文五年高田組郷村万改帳（大沼郡式十箇村）」では、高田村馬次、境新田村、屋敷村、富岡村、西勝村、境野村、寺崎村、米沢村、立行寺村、新屋敷新田村、萬之寄の合計11か村に萱草が出現した。

### 予備的な考察と今後の課題

享保・元文の時代と江戸時代後期に作成された諸国産物帳に出現する、当帰と萱草の分布をマッピングした。ふたつの時代の諸国産物帳がカバーする範囲が必ずしも同一ではないため、分布の単純な比較はできない。また、マッピングに採用した当帰と萱草を表す語彙も限定的である。したがって、本マッピングのみに依拠して、当帰と萱草の分布を議論することは必ずしも適当ではない。そのため、マッピングした地図の読み解きについては、本文で明瞭に記述していない。しかし、本マッピングから、今後、検討すべき課題として考えられることはいくつか指摘することは可能である。例えば、当帰については、江戸時代後期の諸国産物帳での資料が不足する美濃、尾張、筑前、肥後の国での出現が他の資料で確認されれば、日本全国において、当帰の分布の増加傾向はより明瞭となり、江戸時代後期にほぼ全国にいきわたっている様子が明らかとなる。また、周防や長門、福島（陸奥）において、かつて「むませり」とさ

れていた植物が「当帰」に統一されたことが確認できれば、当帰という植物名が、全国へ普及する過程で、統一されていったことが示唆されるかもしれない。

萱草の分析については、当帰よりもやや注意を要するかもしれない。別名が多岐にわたっていることと、甘草だけでなく、萱（かや）として出現する植物も多数あり、名称のみで分布を判断することがやや困難であるからだ。名称の不統一、別の言い方をすれば、近縁種を含めた、萱草の日本全国での多様な利用は、栽培種が多数、創出されるという植物としての特性も関係するであろう。語彙を限定してマッピングしたことが、享保・元文の時代から江戸時代後期にかけて、萱草の出現数が減少したことの背景にあるかもしれない。そうであるならば、当帰も萱草もいずれも日本全土に広がっていったものの、名称が統一された当帰と、多様な栽培種が創出された萱草の生薬としての拡大のプロセスの違いを検討することが可能となるかもしれない。

すでに述べたように、本マッピングのみで、当帰と萱草の分布とそれに基づいた伝播の過程を議論することは適当ではない。上に述べたような予備的な考察をさらに進めるには、本書第3章で辻が試みているように、地域ごとの史資料とあわせて検討することが必要であろう(辻 2021)。本マッピングは、そのための基礎資料として利用されることが望ましい。

## 引用文献

- 岡田雅志．2020．“シナモンから見る近世東アジアの薬用資源流通と薩摩地方”『アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究—シナモンがつなぐベトナムと日本』岡田雅志・柳澤雅之（編）CIRAS Discussion Paper No.97. 京都大学東南アジア地域研究研究所
- 堀田満（代表編）．1989．『世界有用植物事典』平凡社
- 辻大和．2021．“江戸時代の諸国産物帳にみる薬用人蔘（オタネニンジン）の分布—仙台藩と土佐藩を中心に”『アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究（II）—ベトナム・日本の薬用植物資源流通と情報』岡田雅志・柳澤雅之（編）CIRAS Discussion Paper No.104. 京都大学東南アジア地域研究研究所
- 盛永俊太郎・安田健（編）．1985．『享保・元文諸国産物帳集成』第1～21巻、科学書院
- 安田健．1985．『享保・元文諸国産物帳集成』解題『享保・元文諸国産物帳集成』第1巻、科学書院
- 柳澤雅之．2020．“江戸時代のシナモンの受容と伝播—諸国産物帳の分析から”．『アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究—シナモンがつなぐベトナムと日本』岡田雅志・柳澤雅之（編）CIRAS Discussion Paper No.97. 京都大学東南アジア地域研究研究所